

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

涙壺

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009280

「コラム」 涙 壺

山中由里子

悲しみを演出する道具

村松友視の『時代屋の女房』という小説をご存知だろうか。主人公が営む骨董屋に突然現れた謎の女、真弓がまず目にとめるのが、「細長い花瓶の先つばがよじれ、涙を受けやすい不思議な形になった青いガラスのなみだ壺」である。主人は、「イランだかトルコだか忘れたけど、兵士が戦場へ出ていったあと、女房がこのなみだ壺を目にあてて悲しい涙をためておくんだって」とその由来を説明する。この「涙壺」はこの作品の随所に、効果的な小道具として登場する。

一五年以上前、イランに旅をした際に、私はテヘランのガラス陶磁器博物館（ムーゼイェ・アーブギーネ）でこの「涙壺」を初めて見た。この博物館の見どころである古代や中世の器に比べると比較的時代が新しいもので、廊下の展示ケースに比較的無造作に置かれていたが、その色合いにたちまち惹きつけられた。『時代屋の女房』はまだ読んでいなかったのですが、この花瓶のようなものにまつわる逸話のことは知らなかった（図版1 みんばく所蔵品）。

暗青色のガラスの壺の細い首はねじれ、しおれかけた花の茎のようにたわむ。そしてその先に開く口の部分は涙珠にかたどられている。その美しい色や不思議な形を前にして呆然と立っていると、イラン人男性がつかつかと寄って



図版1 「涙壺」

国立民族学博物館所蔵
標本番号 H0224132

きて、「戦場に行った夫や恋人を待つ女が、その涙をためるための壺なんだとさ」と語ってくれた。

なるほど。頬から落ちた涙の糸はこの容器に受け止められ、くねり曲がった頸部をつたつて、螺旋を描いて底へと流れ、たまった涙の量が愛の証となるというのか。泣くという行為をこれほど詩的に演出する道具を持つイラン人はなんと叙情的な人々であろう。また「女の武器」を形にして残すとは、イランの女性はなんとしたたかなのだろうか。感心した。確かに、喜怒哀楽のうち、悲しみは唯一その生理的な発露を目に見える形で保存できる感情であるが、自らの悲嘆の直接的な証拠（言葉や芸術による表現ではなく）を誰かに見せるためにとっておこう、という発想は私にとつては新鮮であった。

最近になって再びこの博物館を訪れる機会があった。「涙壺」はまだ展示されていた。学芸員らしき女性に「これは本当に涙を溜めるためのものだったんですか」と聞いてみると、「涙容れ（アシユク・ダーン）」というけれども、実際にはバラ水容れ（ゴラブ・ダーン）なんですよ」とそれまで頭の中に描いてきた悲哀に満ちた心象をあつさりとはくずされてしまった。

バラ水とはバラの花びらを蒸留し、バラ油を摂取したあとに残った水のこと、イランでは服や体、部屋の中にもふりかけたり、料理に香りを加えるために使う。バラ水の容器はガラス、陶器または金属で作られたが、液体が一度にとつと流れ出ないような、首の細い構造になっている。その繊細な美しさのためにこの器は装飾品・美術品として愛でられた。くだんの首のねじれたガラスの瓶は一七〜一八世紀頃からシーラーズなどで作られ、一九世紀後半にはヨーロッパで流行

し、多く輸出されたそうである。^①

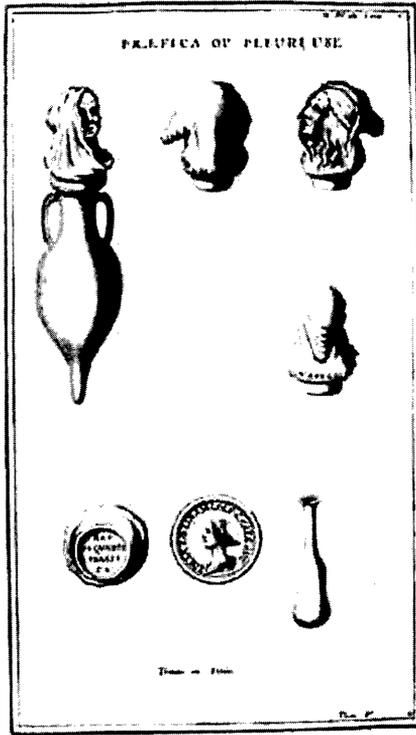
① Arthur Upham Pope ed., *A Survey of Persian Art*, vol. 6 Carpets, Metalwork and Minor Arts, Tehran: Manafzadeh, [1964], p. 2603.

ヨーロッパにおける涙壺

一九世紀のヨーロッパといえば、イギリスは「喪の時代」ともよばれるヴィクトリア朝時代。夫アルバートの死を悼んで、常に喪服を着続けたというヴィクトリア女王の悲嘆に感化されて、喪服、墓、葬儀といった死をめぐる風習に人々がこだわりを持つ風潮の中で、死者に対する哀悼の意を誇示し、演出する道具として「涙壺」*tear bottles* が流行した。

現在は骨董品として集める人もいるようで、愛好家によるウェブサイトもある。^②掲載されている写真や記述を見るとヴィクトリア朝時代の涙壺は試験管か小さな香水の瓶ほどの大きさが主流だったようである。形や大きさからみると、当時輸入されていたというイランの「涙壺」に影響されて作られたのではなく、むしろ古代ローマの墓から副葬品として発見された「涙壺」を模したものと私は推察する。

ヨーロッパでは、古代ローマの墓から多く出土するガラスまたは陶器の小さな壺が、ラテン語で *urna lacrymalis* または *urna lacrymatoria*、英語で *lachrymal vial* または *lachrymatory* などとよばれてきた。ラテン語で *lacrima* は涙の意味であるが、このような名称がついたのは、この小瓶に近親者の死を嘆いて流された遺族の涙が入れられ、それが遺体とともに墓に埋葬されたと信じられてきたからである。現在では、実際には涙ではなく香油か薬油などが入



図版2 「泣き女の涙壺」

Bernard de Montfaucon, *L'antiquité expliquée et représentée en figures* (Supplement 5) *Les funeraillies*, Paris, 1724, plate II.

れられたとする考古学者も多く、この用語は括弧つきで使われる。このような名称と由来はどうも、「珍品陳列室」cabinet of curiosities が流行った一七世紀にさらに遡るようである。大航海時代に世界各地で「発見」された珍しいもの——鉱物、動物の剥製、古代の遺物、異国の産物など——を、当時の王侯貴族や富裕層は競って収集し、陳列した。「驚異の部屋」(英語で cabinet of wonder、独語で Wunderkammer)ともよばれるこの収集品の保管庫兼展示室は、現在の自然・考古学・民族学博物館の原型ともいえる。

「涙壺」のタイプの小瓶は、比較的小さくて運びやすく、大きな器に比べるとおそらく壊れにくく原型を留めていたためか、収集品として人気があつたらしく、ヨーロッパ各地の「珍品陳列室」に納められていたようである。有名なのは、デンマークの宮廷医師、収集家であつたオレ・ヴォルム(Ole Worm 1588-1654)の「珍品陳列室」であるが、息子ヴィルム・ヴォルムがオレの死後に編纂した收藏品カタログ『ヴォルム博物館』には、「陶器」、「ガ

ラス細工」の各章に「涙壺」の項目がみられる。出土地、かつての所有者、色形などの説明に加えて、「このような容器にローマ人は故人のために流した涙を集め、遺骨とともに墓に残した」、とその用途が記されている。^③

啓蒙思想が主流となる一八世紀に入ると、古典古代世界への関心はさらに高まる。考古学の先駆者ともいえるフランスのベネディクト会の僧、ベルナルド・ド・モンフォーコン（一六五五～一七四一）は、『古代図説』をにおいて、ギリシア・ローマの遺物を、図版つきで一〇巻にわたって詳細に解説している。「涙壺」、およびそれをめぐる葬儀儀礼についても詳しく記述しており、古代ローマの人々は、雇われた「泣き女」*praefica*や親族が流した涙を小さな壺に容れ、それを遺灰とともに骨壺の中に入れ、さらに香油を涙と混ぜることもある、とある。^④ 図版2はモンフォーコンが紹介している「涙壺」の一つで、蓋の部分がヴェールをかぶり悲痛な表情をした女性の頭部にかたどられ、「泣き女フラウエア・クワルティア享年六一歳」という碑文がみられる。

ほぼ同時代のイギリスのエフライム・チェンバース（一六八〇～一七四〇頃）による『百科事典』（一七二八）の「涙壺」の項目にもほぼ同様の説がみられるのであるが、このチェンバースの事典に想を得てフランスのデイドロとダランベールが編纂した『百科全書または科学・芸術・工芸の合理的事典』の「涙壺」*“lachrymatoire”*に関する記述では、ローマ人がそこに涙を溜めて故人の墓に入れたという説は、実は疑わしいことがすでに指摘されている。「形状そのものが涙を集めるという用途に全く向いていない」という、まさに「合理的」な理由が挙げられており、実際には「遺灰にかける香油や液状薬を容れるために作られたもの」であったと記されている。^⑥

② 例えば、次のサイト。 <http://www.lachrymatory.com/victorian.htm>

③ ヴォルムの記述をみる限り、この用語はすでに収集家たちの間では流通していたようである。William Worm ed.

Museum Wormianum, Leiden, 1655, pp. 347, 362.

古典史料に「ちやの語は登揚やち、ちやのへ一七世紀の通語にちやのう」と。「Letter from the Rev. L. Vernon Harcourt, describing several Vessels of glass and earthenware, and ornaments discovered near Chilgrove in Sussex. "The Gentlemen's Magazine" vol. 181, 1846 July, pp. 175-6.

- ④ Bernard de Montfaucon, *L'antiquité expliquée et représentée en figures*, vols. 1-5, suppl. 1-5, Paris, 1719-1724. 「尿壺」に關しては五卷（一七二二年）pp. 116-8, plates 98-101¹、ちやの五卷補遺（一七二四年）pp. 14-5, plate 2, p. 122² 「泣き女」については五卷 pp. 14-5。本書はハイデルベルグ大学の考古学関係図書デジタルコレクションに含まれており、全巻オンラインで参照できる。（二〇〇七年四月一六日参照）
<http://www.uni-heidelberg.de/helios/fachinfo/www/arch/digit/montfaucon.html>

- ⑤ Ephraim Chambers, *Cyclopædia, or, An universal dictionary of arts and sciences... the whole intended as a course of ancient and modern learning*, London: Knapton, 1728, v. 2, p. 426. <http://digital.library.wisc.edu/1711.dl/HistSciTech>.
 Cyclopaedia02（二〇〇七年四月一六日参照）

- ⑥ Denis Diderot et Jean Baptiste le Rond d'Alembert, *Encyclopédie, ou Dictionnaire Raisonné des Sciences, des Arts et des Méiers* vol. 9, Paris, 1765, p. 155. 壺の項に「ちやの語は登揚やち、ちやのへ一七世紀の通語にちやのう」と。「Urne」v. 17, p. 75.

『聖書』への連想

考古学が学問として成立してゆく一九世紀に入っても、涙を溜めるといふ風習が古代からあったという説は、根強く残ったようである。その背後には『聖書』「詩篇」の一節——「あなたはわたしの嘆きを数えられたはずです。あなたの記録にそれが載っているではありませんか。あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください。」（詩篇 五六：八、新共同訳）——への連想が働いていたのではないかと考える。ダビデが神に自らの積み重なる苦しみを訴えるこの一

節で、「皮袋」と訳されている語は、液体を入れる袋を指すヘブライ語の「ノード」nodである。主要な英語訳では bottle とされており、英語圏のキリスト教徒はそこからガラスの瓶を想像するようである。

宗教学や歴史家は、『聖書』のこの一節から古代ユダヤに涙を溜めるといふ風習があったと解釈し、そこに「涙壺」とよばれてきた古代ローマの遺物にまつわるとされた喪の儀式を結びつけ、キリスト教的過去とローマ文明を重ね合わせた。その顕著な例は、一八四一年に刊行された『聖書百科全書』にみられる。「埋葬と葬儀儀礼」の項目に「涙壺」への次のような言及がある。

ローマ人の間で広まっていた、涙を小壺 *ampulla*、または涙壺 *urnae lacrymales* に入れるといふ風習は、より古い時代に東洋の人々、特にヘブライ人たちの間で行われていたようである。これらの涙壺の素材は粘土、ガラスなど様々で、形状も多様であった。一人の会葬者が他の参列者の間を、悲しみが最高潮に達したときに、綿の布を持って一人一人まわり、落ちる涙をその布で丹念に集め取り、瓶の中に搾り入れ、細心の注意をはらって保存した。それらは遺された親族や友人たちの想いの記念として故人の墓に入れられた。詩篇作者が（詩篇五六・八）「私の涙をあなたの瓶に入れてください」の一節で言及しているのは、この風習であるに違いない。

（後略^⑦）。

葬儀の様子がいかにも現場での観察に基づくかのように詳しく描かれているが、考古学的裏づけがあるのかどうか疑ってしまう。また、古代ユダヤに実際に涙を溜める風習があったかどうか証拠がないにも関わらず、その儀式が「ローマ人」にも「ヘブライ人」にも共通してあった伝統であることをほぼ確信している。

⑦ William Goodhugh and William Cooke Taylor eds. *The Bible cyclopaedia: or, Illustrations of the civil and natural history of the sacred writings, by reference to the manners, customs, rites, traditions, antiquities, and literature of Eastern nations*, vol. 1. London: J. W. Parker, 1841, pp. 231-2.

ヨーロッパ人によるイランの涙壺の発見

種本があるはずだと調べているうちに、古代ローマと一九世紀イギリスとイランの涙壺をつなげる糸口が見つかった。上の『聖書百科全書』にある、参列者の涙を布に集め取って涙壺に入れた、という記述は、実はイギリスの外交官ジェームズ・モーリア（一七八〇頃～一八四九）の『第二のペルシア旅行』からほぼ一語一句写されたものである。モーリアは、モハツラム月に行われるシーア派の一大宗教行事アーシューラーで、アリーの息子ホセインがウマイヤ朝軍に殺される場面を再現した殉教劇を観覧した際の様子を、次のように語っている。

最も悲劇的な場面では、ほとんどの観客が本気で泣いているようだった。大宰相とその隣の僧の傍に私は座っていたのだが、彼らが大量に流す真の涙を間近で見ることができた。このような嘆きの集会では習慣として、悲しみが最高潮に達したときに僧が綿の布を持って一人一人まわり、落ちる涙をその布で丹念に集め取り、瓶の中に搾り入れ、細心の注意をはらって保存した。これはまさに詩篇五六・八「私の涙をあなたの瓶に入れてください」の実例である。一部のペルシア人が信じるには、臨終の苦しみの中、いかなる治療も効かなくなった際に、このようにして集められた涙の一滴が死にそのような人を蘇生したことがあるという。涙はそのために集められているのである。^⑧

モーリアのこの記録は、「オリエント」の慣習に生き続ける『聖書』の世界の実例として、一九世紀を通して頻繁に引用されたようである。^⑨ 東洋諸国の風俗や慣習に、『聖書』に描かれる古代ユダヤを解明する手がかりを探るという視点は、トーマス・ハーマーというイギリスの聖書学者によってすでに確立されていた。^⑩ モーリアもこういった視点を意識し、当時のイランの宗教的儀式で使われていた「涙壺」と詩篇のダビデの言葉を結びつけているのである。

このように「涙壺」をめぐる一九世紀ヨーロッパ人の言説の奥には、聖書の古代観と近代ヨーロッパの起源とみなされた古代ローマ文明を結びつけ、さらにそこに、聖書の時代から変わることなく存続してきたものとして捉えられた東洋諸国の風習を重ね合わせようという思考がみとれるのである。

こうして宗教感情と古代憧憬とオリエンタリズムを体现するモノとして注目された「涙壺」は、さらにヴィクトリア朝イギリスの感傷的な精神文化の波にのり、喪のグッズとして商品化されたのである。喪服や喪の装身具 mourning jewelry (例えば故人の髪を細工したもの)とともに、涙壺は悲しみを演出する道具の一つとして、特に女性の間で流行したようである。

さらに涙壺はヴィクトリア朝イギリスからアメリカに渡った。南北戦争(一八六一〜一八六五)で多数の犠牲者がでたために、イギリスの喪の文化の需要は十分にあっただのである。そして涙壺の流行は大西洋の反対側でも広まった。^⑪ 冒頭に挙げた、イランの「涙壺」について語られていた「戦争に行った男を待つ女が涙を溜めた」という話は、実は南北戦争時代のアメリカでも流通していたようなのである。^⑫

とすると、涙壺にまつわる言説はまず一九世紀初頭にイランからイギリスに伝わり、商品としての涙壺の登場を促

す要因の一つとなり、涙壺がモノとしてアメリカに渡ると同時にそのまわりに生じた新しい言説が、なんらかのかたちでイランに戻ってきた、ということか？

結局はただのバラ水容れ、とテヘランのガラス博物館の女性は言ったのだが、イランのシーア派の行事で、二〇世紀前半頃までは、涙壺が使われていたことを示唆するペルシア語文献はある。著名な小説家、サーデク・ヘダーヤト（一九〇三―一九五二）は『真珠の大砲』[*up-e morvari*]という風刺的な作品（一九四七）の中で、エマーム・ホセインの殉教物語の語りを聞きながら、殺された人々の苦痛を追憶するシーア派の儀式ロウゼハーニーでの様子について、相当な皮肉をこめて次のように書いている。

狂信者は涙容れの瓶まで持っていて、アリーの息子たちのために流した涙をそこに集め、彼らが死んだ後、その瓶は墓に入れられた。それをもって五〇〇〇〇年の日（最後の審判の日）に、あの世の職員の仕事を楽にやるために、地上でアリーの息子たちのためにいかに心は焼け、両目が月経になったか、証拠を示してやるのである。^④

一九世紀末、二〇世紀初頭のイランの近代化の動きの中で、知識人エリートが殉教劇などシーア派の伝統的な行事を後進的なものとして批判する傾向が強まり、パフラヴィー朝のレザー・シャーは、一九三〇年代初頭にモハッラム月の宗教行事をついに禁止している。^⑤ レザー・シャーの治世に、イラン東部のホラーサーンを中心にフィールドワークをした民俗学者ドナルドソンは、近代化政策で消えかかっていた慣習や民間信仰の貴重な記録を残している。「かつては、長くて曲がった首、洗眼容器のような形をした口の涙壺は数多く見られた。それらはカルバラの合戦で殺さ

れたホセインの殉教を悼んで流された涙を受けるために使われていたものだった」という記述をみる限り、涙壺もすでに一九三〇年代後半には過去の事物となっていたようである。^⑩

儀式の衰退とともに、涙壺は生産されなくなり、かつての用途は忘れられていった。^⑪そして「涙容れ」という名称とモノだけが博物館や骨董品屋に残っていたところに、どういいう経路で伝わったのかは不明だが、愛する者の帰還を待つ女が涙を保存した、という甘美な空想を誘う言説が添えられるようになったのであろう。

⑩ James Morier, *A Second journey through Persia*, London: Longman, 1818, p. 179.

⑪ モーリアの涙壺に関する記述を引用したジューロカの例。 *The Mirror of Literature, Amusement and Instruction*, vol. 21, 1833, p. 393; John Kitto, *The People of Persia*, London, 1849, p. 158; *Sunday at Home: Family Magazine for Sabbath Reading*, 1857, p. 254.

イラン研究者フロアは、モーリア以降のヨーロッパ人旅行者による涙壺の記述を挙げていますが、最も早い例であろうモーリアには言及していません。後の旅行者がモーリアを参照していた可能性は大いにあります。 Willem Floor, *Public Health in Qajar Iran*, Costa Mesa, Mage, 2004, p. 94, n. 78; *ibid.*, *The History of Theater in Iran*, Costa Mesa, Mage, 2005, p. 189. フランスの庄石商ジャン・シャルタンの有名なベルシア旅行記（一七一）に「涙壺」は登場しないうようにもなっています。

⑫ Thomas Harner, *Observations on divers passages of scripture. Placing many of them in a Light altogether new ... by Means of Circumstances incidentally mentioned in books of Voyages and Travels into the East...*, London, 1775 (new edition 1816).

⑬ 次のサイトには、南北戦争時代アメリカの涙壺あるいは涙受け tear catcher のコレクションが紹介されている。
http://19thcenturyartofnourning.com/civil_war_tear_catchers.htm (二〇〇八年四月一六日参照)。

- ⑫ 当時の文学作品には、兵士が妻に涙壺を渡して出兵したという話がよくでてくる。涙壺愛好家のサイトには紹介されているが、そういう作品の原典はまだ確認できていない。 <http://www.lachrymatory.com/civilwar.htm> (二〇〇八年四月一六日参照)
- ⑬ 「血の涙を流したか」の意。
- ⑭ Sadeq Hedayat, *Tup-e morvarid*, Entesharate mard-e emruz, [1984], p. 137.
- ⑮ Kamran Scott Aghaie, *The Martyrs Of Karbala: Shi'i Symbols and Rituals in Modern Iran*, Seattle: University of Washington Press 2004, pp. 25-6, 52-3.
- ⑯ この形状の特徴はまさにテヘランのガラス博物館、大阪の国立民族学博物館所蔵の「涙壺」と一致する。 Bess Allen Donaldson, *The Wild Rue: a study of Muhammadan magic and folklore in Iran*, London: Luzac, 1938, p. 178. さらに同年に『ペルシアの信仰と慣習』をフランスで出版したマセはシーア派儀式で使用される涙壺に関して、アメリカの伝道師ウィルソンの滞在記を引用しているが (S. G. Wilson, *Persian Life and Customs*, New York: Fleming H. Revell, 1900, p. 192) ‘トヤ自身はそれを見たことがなくヤベトヤベト’ Henri Massé, *Croyances et Coutumes Persanes*, Paris: Maisonneuve, 1938, p. 126.
- ⑰ カーシャーヤテヘランのガラス工房では、涙壺も含めたカージャー朝スタイルのガラス容器の複製が一九五〇年代、一九六〇年代頃まで作られていた。このような複製品の涙壺には、おそらく元来の宗教的な用途はなく、装飾品、バラ水容れとして使われたのだろう。民博所蔵の「涙壺」は、おそらくカーシャーヤンのムハンマド・グリーリーに由来一九五〇年代のもの。 Jay Gluck and Sumi Gluck eds, *A Survey of Persian Handicraft: a pictorial introduction to the contemporary folk arts and art crafts of modern Iran*, Tehran, 1977, pp. 98-99, 106.